

わたしの愛唱讃美歌

その5

ご入居者様の愛唱讃美歌を紹介するシリーズの第4回目です。
好きな讃美歌にまつわる思い出を伺ってまいります。

城崎 幸子 姉 (南山教会)



讃美歌(1954年版) 284番

主のとうときみことばは
わがいのちのもといなり、
たよるわれは安けしや、
世にまたなきみことばよ。

戦争がまだひどくなる前、16歳の時、三重県川越の自宅から東京の清瀬にあった自由学園に編入して寮生活を始めました。4万坪の広大な敷地の中で、少人数クラスの個性的で素晴らしい教育を受けました。そこで初めてキリスト教に出会ったのですが、この讃美歌284番を聞いた時の感動は忘れられません。自由学園で過ごした3年の間に、だんだん戦争が激しくなって小学部が疎開することになり、私もお手伝いのために那須に行きました。本当に大変な仕事でしたが、今となっては楽しい思い出です。それでも小学生と一緒によくこの讃美歌を歌いました。

音楽家になるつもりはありませんでしたが、フルートの音色が好きで、高価な楽器を買ってもらい、有名な先生の指導を受けながら喜んで練習に励みました。

高校3年の時に戦争が終わって、三重県の実家に帰ると生活がガラッと変わりました。蔵の物を売って生計を立てながら、父の畑仕事を手伝う苦しい毎日でした。讃美歌と聖書が支えでした。

夫は代々木教会で受洗していましたが、転勤族だったために、教会を転々とし、私は岩国教会で受洗しました。夫婦共に讃美歌が大好きで、「まきば」に入居して南山教会に転会してからも、よくオルガンを弾いて練習をしました。

戦争中も、子育ての時も、自然に浮かんでくる讃美歌はたくさんありますが、なかでも好きなのがこの讃美歌284番「主の尊き」でした。

城崎幸子姉は2018年12月29日、み許に召されました。この記事は、その2週間前に病床上で聞き取ったお話をまとめたものです。



若山 朝子 姉 (刈谷教会)



讃美歌(1954年版)312番

いつくしみ深き 友なるイエスは、
罪とが憂いを とり去りたもう、
こころの嘆きを 包まず述べて、
などかは下さぬ 負える重荷を。

子どもの頃、日曜日の朝になると、5人の姉妹が両親に手を引かれて名鉄三河線に揺られ、刈谷の家から岡崎教会まで通っていました。あまりに遠かったので、私の家での家庭集会が始まりました。人数が増えるに従って碧南の集会が独立し、それでも受洗者が45人になったので、岡崎教会の伝道師だった小崎弘雄先生を迎え、空いていた蚕小屋を改造して、刈谷教会がスタートしました。

子どもの頃の刈谷教会には教会学校が無かったこともあって、子どもにも親しみやすい讃美歌が配慮されていました。幼かった私は、この「いつくしみ深き」の前奏が始まると嬉しかったことを思い出します。そんな思い出だったので、刈谷教会に教会学校ができると同時に、教師として奉仕しました。

結婚してからは、夫の勤務の関係から各地の教会を転々としましたが、最後は刈谷に戻りました。

まだ「まきば」が計画段階だった当時、小崎先生から老人ホーム建設計画の話聞いて、その足で現地を見学に来ました。予約してから10年ほどして私たち夫婦が入居した時、先に入居しておられた小崎先生はすでに呼吸が苦しい状態でしたが、少しの間でも一緒に生活できたことは嬉しい思い出になりました。

名古屋教会に在籍していた当時お世話になった戸田先生夫妻や信徒の皆様と、こうして一緒に暮らしていただけるのも嬉しい限りです。

長く苦しんだ持病も、「まきば」に入居したらすっかり治ってしまい、「私にはこのホームが合っていたんだ」と思っています。

